

## 消されていた通りと番地

### －オネジム＝エドゥアール・セガンの青年期を訪ねて－

学習院大学 川口幸宏

2005年3月初旬のある日、パリ国立古文書館に保存されている一枚の書類に記載されていた住所を訪ね歩いた。書類はオネジム＝エドゥアール・セガン(1812-1880)のパリ大学法学部在籍簿である。

彼は、バカロレア有資格者として1830年11月5日にはじめて学籍登録をしている。在籍簿に示されている彼の修学の軌跡は、なかなかおもしろい。第1課程全7学期の履修登録はなされているが、第2課程全5学期のうち履修登録は最初の3学期しかなされていない。第3課程となるとまったく履修登録がなされていないのである。法学部への最終登録は1841年9月24日となっている。つまり、セガンは、法学部に、延べ約11年間断続的に在籍していたことになる。セガンが法学部11年間の歳月をかけていたことは、まったく新しく知ったことであった。彼のこの長い期間はその激動の人生を背負っている勲章でこそあれ、放蕩三昧の自滅破壊傾向を持つぼくの青年期とはまるで異なるのだが。

ところで学籍簿の末尾に次のような記載事項がある。最初の2事項は抹消線が引かれていた。

rue Sainte Anne 24 (サンタンヌ通り 24)

rue D'enfer 7 (ダンフェル通り 7)

374 Saint Denis (サンドゥニ 374)

セガンが法学部学籍登録時に登録した住所である。それぞれいつからいつまで住んでいたのかは不明であるが、サンタンヌ通り 24 は第1課程第1学期登録時の住所であることは間違いないだろう。ダンフェル通り 7 は第2課程登録の時、サンドゥニ通り 374 は第3課程修了試験登録の時の住所だと推測する。学籍簿記載住所の他にも彼が居住していたことも判明しているので、それらをあわせると次のようであったと考えられる。

1829年 王立コレージュ・サン＝ルイ入学 パンシオン (サン＝ルイ校寄宿舎)

1830年 パリ大学法学部第1課程学籍登録 サンタンヌ通り 24

1831年 パリ大学法学部第2課程学籍登録 ダンフェル通り 7

サン＝シモン主義「家族」共同生活 モンシニ通り 6

(この間不明。「(1836年は)死に見舞われるほどの病気上がり」との回想記録がある。)

1839年 「白痴」教育を手がけ高い評価を得る ラ・ショッセーダンタン通り

1840年 私立「学校」をを自力で開設 ピガール通り 6

1841年 不治者救済院で「白痴者の教師となる」 サンドゥニ 374 (不治者救済院)

1842年 ビセートル救済院内養老院に住み込み「教師」を務める。 パリ南郊外

1843年 同上罷免となる 居住地不明

(この間不明 大著を幾つか著している。)

1847年

ロシェ通り 35

1848年 第二共和政のための運動に加わる。

1850年 アメリカに移住

もちろん書類上の登録住所と実際の居住地とが異なることもあるだろう。それにしても変転有為の青年期を送っていたことは容易に推測させてくれる住所遍歴である。

\*

故郷のニエヴル県クラムシーを幼年期に旅立ち、隣県（ヨンヌ県）の県庁所在地オーセールの王立コレージュで学び（コレージュに併設されたパンシオン＝寄宿舎で過ごす）、17歳の時にパリの特級コレージュの一つである王立コレージュの数学準備課程に第4席次で入学した。入学の翌年1830年7月にパリに大動乱が起こり、王政復古体制から立憲王政体制へと政治体制が変わる。この「7月革命」と呼ばれる一大社会変革を18歳の青年は目の当たりにしたわけである。そのことが彼をして同年の法学部進学への路をとらせたのかどうかは不明であるが、その翌年のサン＝シモン主義「家族」の一員とならしめたこととは大いに関連している。サン＝シモン主義は、初期社会主義としての性格を持ち、「より多くの、より貧しい階級の、より速やかな改善」を訴えた思想・運動集団であり、また宗教集団である。セガンはこの運動に参加することによって、王政を否定する共和主義者として自己を確立することになる。

20歳の時に徴兵のため故郷クラムシーに戻るが「右手にゆがみがあり身体虚弱」のため兵役を逃れた。その後の彼の足跡は、数年間不明である。1836年24歳の時に、プレスという新聞の創刊に関わり、同紙に4本の芸術批評を寄稿しているから、文芸批評家として身を立てるつもりであったのだろうか。また同年、サン＝シモン主義よりもよりラディカルな結社「家族協会」に加盟した。「家族協会」の主宰者はバルベスとブランキーという人であるが、共に社会変革や革命に半生を捧げた人であり、人生のかなりの多くの期間を牢獄で過ごしている。今回の旅の収穫の一つは、バルベスとブランキーが「家族協会」に続いて創設した結社「四季協会」にたいする裁判記録を入手したことである。「四季協会」の主要メンバーは立憲王政に対する社会・政治革命を起こし、わずかな時間にしか過ぎないが、オテル・ドゥ・ヴィルを占拠し「臨時政府」の樹立宣言をした。裁判記録にはセガンの名は現れてこない。二人のうちバルベスは、1848年にフランス社会における王政に終止符を打ち、短いながらも第2共和政を築いた「2月革命」の際には、セガンと共に共和政の運動体の一つで共同歩調をしているのである。セガンの名は登場しなくとも、裁判記録は、セガンの思想・運動家としてのバック・グランドを探るにはどうしても必要な史料であった。

ところで1838年に、彼の境遇がまったく変わる。セガンは、一人の医学博士の紹介によって著名な老医学博士イタールに引き合わせられ、「白痴」で唾の一人の少年に対する教育・訓練に携わることになった。14ヶ月間の教育・訓練の成果はフランス医学界で高い評価を受けることになる。この実績を背負ってセガンは、1840年にピガール通り6の共同住

宅内に白痴・痴愚の子どものための学校を自力開設した。この学校は公教育に関する王立評議会によって開設認可を受けている。従って単なる私教育学校なのではない。1842年からはパリ市民救済院総評議会から招致を受け、救済院（今日の社会福祉機関に相当するが精神病患者も収容されていた）に収容されている「白痴」「痴愚」等の子どもの教育に携わることになった。これは救済院総評議会が「白痴」「痴愚」等の人格発達不能と呼ばれていた子どもに対して「医療」「宗教」「教育」の一体による人格形成をなすべく、救済院内に「学校」を設ける方策を採り始めたことと無関係ではあるまい。病弱児に対する「医療」「宗教」「教育」一体の人格形成は19世紀に入ってすぐ開始され、「病弱児はフランス市民となる」との標語の元に、今日で言う「院内学級（学校）」での実践が行われていた。その成果に立って、教育対象児を「白痴」等の子どもに広げる方策が積極的に打ち立てられた。ただ、「白痴」等に対しては「医療」者すなわち医師の占有事項であったのだから、医師ではないセガンに対してわざわざ「白痴等の教師」という肩書きを与えて救済院に雇用したわけである。このことによって、施療院・救済院という医療・社会福祉機関で、病弱児・知的障害児の区別なく医療訓練・道徳・知的身体的教育による人格形成のための「施設内学校」が成立したこと、そしてそのもっとも初期の段階でセガンがその実績づくりに貢献したことの事実、ぼくたちはもっとも目を向けていいと思う。

しかし、おそらくではあるが、セガンは医師や司祭の領域に足を踏み入れすぎたようである。セガンにしてみればその三位一体を一つのシステムの下で矛盾なく行うことが子どもの人格形成に必要であったのであろうが、「軒」を貸したはずが「母屋」の中まで入ってくるセガンの教育実践は、それがヨーロッパ社会で高い評価を受ければ受けるほど、「母屋」の主たちにとっておもしろかろうはずはなかった。救済院管理者名でセガンに対して医師たちによる医療訓練下に入るように命令が出されるが、セガンはそれに従わなかった。結局、パリ市民救済院総評議会は、1843年暮れに、セガンの罷免決定したのである。

およそ2年間の救済院での教育実践に対する報酬は400フランであった。それは、13歳で入ったオーセールのコレージュの第1学期分のパンシオン費と同額である。第1学期はおよそ6ヶ月。彼に支払われた報酬がいかに低いものであったか、分かるだろう。

\*

現在のパリ地図を手がかりに、エドゥアール・セガンの居住地を求め歩く。幸いなことに、パリの住所名は古い時代につけられたものが残されているところが多い。地下鉄キオスクで購入したパリ区別地図とパリ全図との二つが探訪の武器である。区別地図の索引から住所表示（通り名）を探し区別地図上で番地に標を付ける。パリの番地の付け方は、セーヌ川を起点にしている。数字が大きければセーヌ川から遠ざかる。偶数は通りの右になる。この一つひとつの作業を終えたあとパリ全図にその標を移し替える。パリ全図を拡げるとセガンが転々とした居所の全貌が分かる。その後、ぼくの「パリの歩き方」、すなわち行程が決まる。

30年ぶりの寒さに襲われているという中でも比較的暖かなある1日、法学部の学籍簿に

記されていた 3 つの住所とサン＝シモン主義「家族」で共同生活をしていた住所を訪れることにした。起点はパリ 5 区モンジュ通りの宿。すぐ近くに我が教育界になじみ深い人名がつけられたペスタロッチ通りという小路があり、やや離れたところにはランジュヴァン広場がある。

ペスタロッチ通りを抜け、高等師範学校を通り、セガンの最初の「白痴」教育の師イタール博士が一人の野生児の医療訓練を施した聾啞学校が面しているサン＝ジャック通りを過ぎ、サン＝ミッシェル大通りに出る。途中で、ヴィクトル・ユゴーが幼少年期を過ごした住所<sup>1</sup>とも出会う。サン＝ミッシェル大通りはすぐにモンパルナス大通りと交わっている。



モンパルナス大通りをセーヌ川から遠のく形でやや行くと左側の界限に、パリ 14 区の現 passage D'enfer (パッサージュ・ダンフェル) がある。非常に古いタイプの集合住宅が古い石畳のパッサージュを挟んで計 30 メートルほど続いていた。セガンが住んでいたと推測される 7 番地は写真右手の奥の方になる。番地番号の振り方はたいそう珍しく、奇数列偶数列が通りで分けられておらず、まさ

に自然数列で棟が並んでいる。この通り名を、あえて日本語に直せば「地獄からの抜け道」となるか。この何とも恐ろしく愉快的地名に対して持った強い関心が、後に、現在のパリとセガン時代の旧パリの地理学的な大きな差異という至極当然の事実気づかせてくれることになる。このことについてはまた後で触れることにしよう。

モンパルナス大通りを引き返し、サン＝ミッシェル大通りをセーヌ川に向かって歩を進める。大通りを、地球儀を高くいただいたオブジェの立つマルコ＝ポーロ広場、リュクサンブール公園を左手に過ぎす。やがて右手にソルボンヌ広場、左手にリセ・サン＝ルイを見る。サン＝ルイ校はセガンが 1 年余学んだところである。通りからは見えないが、サン＝ルイ校の奥手にセガンの父親が医学を学んだパリ医学校（のち医学部）がある。現在のパリ第 5 大学（リュネ・デカルト大学）。ぼくのフランスでの研究のアシストをつねに行ってくれる A さんが在籍しているところでもある。さらにサン＝ミッシェル大通りを進む。セーヌ川を渡りシテ島を通り過ぎす。突然、界限が変貌する。それまでが整然と紳士然とした街並みだと形容するならば、ここは雑然とした下町の色街界限の雰囲気である。通り名を示すプレートに rue Saint Denis（サンドゥニ通り。旧サンドゥニ街道と添え書きがしである）とあるのを確かめて、偶数右側の番地を探りながらゆっくりと歩く。セガンが住

<sup>1</sup> フォイヨンティンヌ通り。もとは行き止まりの道。後年、この通りがイタール研究、セガン研究にとって意味のあることを知るようになる。

んでいたのは 374 であるからさらに先であることは承知していても、やはり見逃してはならないと、神経を集中させる。建築物は多種雑多であり、様式を整えられた整然としたパ



リというイメージからはほど遠い。途中で何人もの客引きに出会う。真っ昼間からの売春である。これが日本ならば明らかに違法行為であるが、ここフランスでは違法なのかどうか、ぼくは知らない。通りは 1 区から 2 区に入っても続いていた。住居表示番号も 200 番台に入っている。あと 100 番ほどのところで突然視界に巨大な古い門が入ってきた。17 世紀に作られたサンドゥニ市門である。

市門はパリ市内とパリ郊外とを区分する重要な役割を果たす。というより、かつてはパリの外から入ってくる様々な物資に掛けられた入市税を徴収した場所である。市門と市門の間には城壁が築かれ、市内外を厳然と区別していた。もちろん現在のパリにはこの城壁は無い（中世期の城壁跡がパリ市内に何か所か残されているが）。写真は市門をくぐり抜けサンドゥニ通りを旧パリ市内方向に振り返って見たものである。市門の外はフォブール・サンドゥニ通りと名前が改まっている。フォブールは郊外という意味である。通り名にもパリ市内外の区別がつけられているわけである。ちなみに、1830 年の「7 月革命」の際、この市門周辺で壮絶な戦いが繰り広げられた。セガンの居住した住居番号は現在残っていないが、おそらくこの市門の向こう左手奥の住宅あたりであったのだろう<sup>2</sup>。

続く探訪場所はオペラ座の近く。ポアソニエール街路樹通りという大通りを進んでいけば簡単なのだが、疲れが出始めた体ではできるだけ近道がいいと、「三角形の一辺は他の二辺の和より小さい」という公理を採用し、幾つかの狭い道を通り抜けた。求めるパリ 2 区 **rue Sainte Anne**（サンタンヌ通り）は寿司・焼き鳥・ラーメン・うどんなど各種日本料理店が並ぶところである。A さんが日常の食材を求める韓国食材店もこの通りに面しているとか。余談だが、韓国食材店とはいうものの、今回の旅の帰国 2 日前にこの店で買った暖かい鯛焼きを A さんからプレゼントしていただいた。店番が「これは日本のものだけど、日本語で何というの？」と彼女に聞いていたそうであるから、タイヤキは日本のオリジナルなガトーなのだ、この時に知った次第である。サンタンヌ通りを起点から偶数番号、すなわち右側の棟々を追っていく。22 番まで来て突然道が交差した。交差点を渡ってすぐが 28 番となっているではないか。24 番と 26 番は消えて無くなってしまっていた。この界限は、新旧取り混ぜた建築物が、しかし比較的整然と並んでいる。度重なる革命などの動乱

<sup>2</sup> 学籍簿記載住所は不十分なものであった。セガンが招致された男子不治者救済院の住所番地であると推測され、セガンは同機関で住み込みで働いていたのである。

の被害に遭うことが少なかった地域だが、建物の老朽化によって建て替えられたのであろう。

サン＝シモン主義者たちがヒエラルキーを持った一つの家族として共同生活に入ったモンシニ通りは、サントヌ通りから近くのある場所にある。写真（左）奥の左手白い建物の中程が共同生活の場となっていた 6 番である。建築様式で言えば写真手前の黒っぽい建物よりも白い建物の方が古い。当時のままの姿を留めているのである。この共同生活の中で、



ろう唾者が発話会話をする光景をセガンが目の当たりにしたことが、セガン研究にとっては核心的なところである。発話をしたろう唾者というのはペレールという人物の教え子であった。ジャン・ジャック・ルソーがペレールの実践の場に足繁く通い、実践を観察し、『エミール』執筆の一つのバック・グラウンドとしたことは、よく知られていることである。ペレール実践の場もまたパリ 2 区内であった。

\*

パリの地名には驚きと喜びとの出会いが多い。革命家ブランキー、ルイズ・ミッシェルなどの名が冠せられている人名通りもあれば、魚を釣る猫通り、悪ガキ通りというような通り名もある。それぞれに歴史がある。多くは歴史表示でその名の由来などが示されている。しかし、この日出会った「地獄からの抜け道」は歴史表示がなされていなかった。何とか由来を知る手だてはないだろうか、ソルボンヌ広場にある「ソルボンヌ広場書店」に出かけた。『1855年の通りと記念建築物の歴史事典』という約 800 ページの本がレジのすぐ近くに置かれていた（1885年初版本の 1993 年再版本）。パリは第 2 帝政（ナポレオン III）期に大改造がなされている。同書はその大改造直前のパリを描いたものである。オスマン改革と言われるパリ大改造は、フランスの近代文明化の中心都市としてのパリ建造を目指したものであり、貧窮者をパリ市内からパリ周辺に追い出し、それまで度重なってなされたバリケード闘争を以降は無用ならしめるように設計された。つまり、政治と産業の中心都市としての機能を最大限に引き出すことを意図して行われたものであり、フランス社会の近代化推進に大きな拍車を掛けたという意味において、高く評価されている。1871 年のパリ・コミュンは、このオスマン改革のために民衆側が敗北したとも言われているほどである。オペラ座の周辺の建築物に象徴される見事な様式はオスマン様式と言われ、最近建てられ始めたコンクリート造りの新建築様式としばしば対比されるほど、芸術的な趣が感じられる。一般には「古いパリ」を象徴する建築様式であるが、ぼくにとってオスマン様式は「新しいパリ」の範疇に

入るわけである。

オスマンによるパリ改造以前のパリで生活したセガンの足跡を追うならば、当然、800ページの歴史事典を入手しなければならないと、「地獄からの抜け道」に対する興味に付加価値を設けて、購入した。カフェに入り「ダンフェル通り」の項を見る。まさに、とんでもない記述に出会った。長さ1591メートル、偶数128番、奇数133番だという。「地獄からの抜け道」の比ではない。起点は旧ソルボンヌ街のサン＝ミッシェル広場、終点は旧パリのサン＝ジャック大通りで交差している。旧パリ11区12区（セーヌ川左岸）の目抜き通りと言ってよい。「地獄からの抜け道」は、この「地獄通り」から枝分かれしたものに過ぎなかった。当然、セガンが住んでいたに違いないと思いこんで写真に収めたところは、とんだ見当違いであったわけである。

セガンが住んでいたところは、リュクサンブール宮殿にほど近く、王立コレージュ・サン＝ルイ校もソルボンヌも医学部も、そしてダンフェル通りと平行して走っていたサン＝ジャック通りに面していた法学部も、すぐ近くなのである。ついでながら、「サンドゥニ通り」は、同事典によると、長さ、1349メートル、偶数番は402まであったとある。サンドゥニ市門からはほんの少し離れているようだけれど、確信を持ってないままである。「サンタヌ通り」は旧パリ地図と現在とが変わっておらず、空白番地は謎のままである。事典には長さ520メートル、偶数番68までと記されていた。

重くて嵩張るこの事典を、帰国の荷の中にどのようにしまおうかと、試行錯誤を重ねたのは探訪の翌日の夜。抹消されたものを復元してくれるこの書物にずっしりとした手応えを感じるのであった。帰国直前に旧パリの全体を示す大判の地図も入手した。まずそこに標を入れ、それから現在地図に標を移し替える作業は帰国後の楽しみとなった。

(2005年3月10日)